

「森の幼稚園カリキュラム」における幼児と 自然との相互作用に関する研究

— 他者とのかかわりにみる幼児の変容プロセス —

中西 さやか・中坪 史典・境 愛一郎¹

(2010年10月7日受理)

A Study of the Interaction between a Child and Nature in the Forest Kindergarten Curriculum
— The process of a child's change through his involvement with others —

Sayaka Nakanishi, Fuminori Nakatsubo and Aiichiro Sakai

Abstract: The purpose of this study was to clarify the process of the change in interaction between a child and nature through a child's involvement with others. Nature is regarded as important in early childhood education and care, and the educational effects of nature are clarified in some earlier research. However, this earlier research focused on the importance of nature, or some of children's abilities fostered as a result of their involvement with nature, and this previous research did not clarify the process of each child's change. Therefore, in this study, we selected a child at a specific kindergarten, and researched the process of how he changed as a result of his interactions with nature. We observed the actions of the child in nature by video fieldwork and selected some episodes in which he was absorbed in activities with nature. Next, we analyzed the data using the Steps for Coding and Theorization (SCAT) method. The result of this study is summarized in the following two points: 1) the child's initial interest in and involvement with others, and 2) the child's behavior changed when interacting with nature. In the first point, we noted the change in the child's interest. At first he was interested in his teacher and in the other children, but he gradually grew more interested in nature. In the second point, the child's behavior changed when interacting with nature. At first, his behavior was passive, but it gradually became positive. These changes were a result of his concern with contents of activities in nature.

Key words: a child, nature, interaction, others, the process of the change

キーワード：幼児，自然，相互作用，他者，変容プロセス

1. 問題と目的

本研究の目的は、自然との相互作用における幼児の具体的な変容プロセスを、他者とのかかわりに着目することを通して明らかにすることである。

近年、幼児と自然のかかわりの重要性が指摘され、自然を取り入れた保育に関する実践や研究がさまざま

な形で行なわれている。本研究の対象園であるF幼稚園においても、現在「森の幼稚園カリキュラム」の開発を志向した実践研究が行なわれている。田尻・無藤（2005）は、ほとんどの保育者が自然とのふれあいが子どもの成長にとって大変重要であると感じていることをアンケート調査によって明らかにしているが、そのように幼児と自然のかかわりが重要視されるのは何故だろうか。

この点に関し、『幼稚園教育要領』（文部科学省

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

2008)では、領域「環境」の中で、「幼児期において自然の持つ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるように工夫すること。」と述べられている。すなわち、自然に直接触れることで、情緒面、認知面などのあらゆる力の基礎が培われると捉えられているのである。

幼児と自然に関する先行研究に目を向けると、自然環境と子どもの育ちに関するもの(吉田・宮本 2008)、自然を取り入れた保育環境に関するもの(藤井・高月 2003, 松田 2004, 石倉 2008)、自然を取り入れた保育の実態に関するもの(田尻・無藤 2003)、自然についての保育者の意識に関するもの(越中・杉村 2008)、ドイツやデンマーク、スウェーデン等海外の自然を重視した保育実践に関するもの(腰山 2001, 百合草 2002, 福田 2006)等、多様な観点から検討されているが、幼児と自然がかかわることの意義については、豊かな人間性や感性の育成、認知・思考力の発達、科学的の芽生え、運動能力の発達等、幼児の全体的な発達にとって意義のあるものとして捉えられている。

このように、幼児と自然がかかわることは、幼児の情緒面、認知面をはじめとする全体的な発達、育ちに寄与するものとして捉えられていることがわかる。確かに、自然環境は、他の環境にくらべて変化に富んだ刺激的なものであり、また雄大さやうつくしさを持つものでもあって、幼児の成長発達にとって有益なものであると考えられる。しかし、これらの先行研究においては、自然の重要性や自然とのかかわりを通した子どもの育ちに着目し、そのような観点からの事例研究は行なわれているものの、実際に一人の幼児が自然を取り入れた保育の中で、どのように変化していったのかという具体的なプロセスについては明らかにされていない。「自然がいかに重要か」、「幼児にどのような力が育つのか」という観点は、自然を取り入れた保育の在り方を考える上で必要不可欠なものではあるが、このような見方に引き付けて幼児の活動を捉えるだけでは、一人ひとりの子どもの具体的な変容過程に迫ることはできない。

そこで、本研究では、F幼稚園の「森の幼稚園カリキュラム」の一環である自然を取り入れた保育の中で、一人の幼児がどのように変容していったのかというプロセスを明らかにする。その際着目したいのが、対象児にとっての他者の存在の意味あるいは他者とのかかわりの変化である。幼児は、保育者や友だちなど、他者との関係性の中で育っていくものであり、他者の存

在の重要性については、十分に認識されているといえるだろう。本研究の対象児においても他者の存在が重要なものであることは同様であり、実際に分析を進めていくうちに、対象児と他者とのかかわりが次第に変化していることが明らかとなった。よって、ここでは、他者とのかかわりを通して、一人の幼児の変容プロセスを追うこととする。

また、多くの先行研究においては、「幼児と自然のかかわり」、「自然体験」という言葉が用いられているが、本研究では、幼児と自然の関係性は一方的なものではなく、相互に影響しあうものであるという立場から、両者の関係性を「相互作用」として捉えることとする。

2. 研究対象と研究方法

2.1. 研究対象児の概要

本研究では、F幼稚園の年中児クラスに在籍するA児(男児、4歳児)を対象とした。F幼稚園は、豊かな自然環境に恵まれた園であり、平成18年度より、「森の幼稚園カリキュラム」の開発を目指した実践研究が行なわれている。

A児は、両親と姉の4人家族で、2010年4月に入園した新入園児である。A児は、入園当初から母親と離れることに抵抗を見せず、園生活に適応し楽しんで様子が見受けられた。A児は図鑑やテレビ、家族との会話等から得たさまざまな知識を持っており、友だちに「これは〇〇なんよ。」と自分が知っていることを教える姿なども見られる。このように豊富な知識を持っている一方で、自分が知らないものや経験したことがないことについては、臆病になる一面を持っている。自分が「いやだな」「こわいかもしれない」などと感じることに対しては、興味本位で近づいてはみるものの、自分から積極的にかかわりを持つとはしない。たとえば、虫捕りの場面では、虫を見つけること自体は楽しむが、その虫を捕まえる、触るということになると臆してしまうようである。友だちが虫を捕まえようとしていると、「触ったらあぶないかもしれんから、触らん方がいいよ」などと声をかけていることから、「触ったらあぶない虫もいる」という知識や直接虫を触るという経験の不足がA児を臆病にさせているということが推察される。

このように、A児はいろいろな知識を持ち、また、自然に対しても興味を持っていることが伺えるが、直接的な自然体験が少なく、興味があるのに臆病になってしまう側面がある。そこで、本研究においては、新入園児であり、幼稚園の自然環境に馴染みのないA

児が、「森の幼稚園」における保育の中で、自然との相互作用を通してどのように変容していくのかを捉えるために、対象児として設定した。

2.2. 研究方法

本研究は、①ビデオフィールドワーク、②エピソードの抽出、③データの分析、という手順で行なった。【ビデオフィールドワーク】幼稚園の「森」で行なわれる設定保育場面におけるA児の様子をビデオカメラで撮影した。ビデオフィールドワークは、2010年4月23日から同年7月9日までの間に計12回実施された。対象時間帯は、1回の観察につき9時30分から11時30分までの120分程度である。ビデオの総録画時間は14時間45分15秒であった。

【エピソードの抽出】ビデオフィールドワークにおいて記録された映像データの中から、Leavers (1994)の提示する「夢中度」に関する評価尺度 (The Scale for Involvement) を参考にして、A児が活動に没頭している場面＝「夢中度」が高いと思われる場面を抽出した。抽出したエピソードは全部で14である。

「夢中度」の高い場面を抽出した理由としては、自然の中での保育において、夢中になっているときほど、自然との相互作用が活発になると想定したことが挙げられる。

【データの分析】次に、それらのエピソードデータを、大谷 (2008) による SCAT (Steps for Coding and Theorization) という質的データ分析の手法を用いて分析した。具体的には、①データ中の着目すべき語句、②それを言い換えるためのデータ外の語句、③それを説明する語句 (概念)、④そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順に4ステップのコーディングを行ない、それらをもとにストーリーラインの記述を行なった。実際の SCAT による分析データを表1に示す。

3. 結果と考察

以上のような分析の結果、自然との相互作用においてA児と他者とのかかわりが次第に変化していることが明らかとなった。そのような変化に着目すると、A児のエピソードは、第1期 (4月23日～5月28日)、第2期 (6月10日)、第3期 (6月18日～7月9日) という3つの時期に分けることができる。以下では、この3つの時期区分に従って、A児のエピソードの分析結果を示し、それに対する考察を行なうこととする。尚、以下で取り上げるエピソードは表1に記されているものの抜粋である。

【第1期】 (4月23日～5月28日)

<エピソード>

1-①「あー、これおいも。おいも見つかった」と呼びかけるが誰も来ない。(事例1：4月23日)

1-②「サルトリイバラが見つかりましたー」とD先生に駆け寄る。(事例2：4月27日)

1-③「けむしー！」と大声で叫びY先生やD先生に知らせる。(事例4：5月28日)

<考察>

この時期のA児は、全体的にみると活動への夢中度があまり高くない状態であった。保育者から指示されたことをやってみるものの、興味が持続することは少なかった。また、保育者からの指示を聞いておらず、友だちと一緒に勝手にどこかに行ってしまうことも何度かあった。

ここに挙げたエピソードは、そのような中でも比較的夢中度が高かった場面である。これらのエピソードは、いずれも「他者への呼びかけ」である。活動のなかで自分が何かを発見したとき、それを報告するように、保育者や他児に対して呼びかけている。このような報告としての他者への呼びかけは、自分の発見したことを誰かに聞いてほしい、認めてほしいという思いによるものであると考えられる。この時期のA児は、活動そのものに対する興味を持つというよりも、発見したことを報告することによって、保育者や他児とかかわろうとしているように見受けられた。よって、第1期のA児と他者とのかかわりは、「他者への応答・承認の要求」として捉えることができる。

【第2期】 (6月10日)

<エピソード>

2-①先生に木の枝の上に乗っぼくりに置きたいと伝える。(事例6：6月10日)

2-② (木登りに挑戦している場面で) 前を行く子について行く。(事例7：6月10日)

<考察>

第2期になると、第1期に比べて、活動への夢中度が高い場面が増えてきた。2-①のエピソードでは、チームに分かれて乗っぼくりに隠し、相手チームの隠した乗っぼくりに探すというゲームの中で、A児は乗っぼくりの隠し場所を考えるために、試行錯誤したり、あれこれと思考をめぐらせている。その後、保育者に木の枝の上に乗っぼくりに隠したいと伝えている。このようなA児の行動は、単なる「保育者への支援要請」とも考えられるし、また、「自分の考察の他者への確認」として捉えることもできる。いずれの場合にしても、A児が活動に没頭し、隠し場所を探

求したり思考をめぐらせたりする中で、更なる活動の展開や自らの思考を確認するための他者とのかわりが見られたのは、このときが初めてである。

また、2-②のエピソードにおいても、これまでとは異なる形での他者とのかわりが見られる。木登りに挑戦する場面で、A児はなかなか前に進むことができず、何度か木から降りては再挑戦する、ということを繰り返していた。何度目かの挑戦で、自分の前を行く他児の足取りを真似して、ついて行くように進み、結果としてゴール地点にたどり着くことができた。ここでの他児の存在は、「モデル的存在としての他者」、「挑戦意欲をかきたてる他者」として捉えることができる。このエピソードは、他者の存在によって、木登りというA児の目標の達成がうながされたことを表わしている。

【第3期】（6月18日～7月9日）

<エピソード>

3-①オタマジャクシを捕まえようとする女の子に（中略）オタマジャクシがいる方向を指さし「おる！おる！おる！」と声を出すなど、アドバイスをする。（事例9：6月29日）

3-②ザリガニの入ったバケツを見て「泥が好きなん？」と指導者に尋ねる。（事例10：6月29日）

3-③他児に「あっちザリガニおる？教えて」と聞き別の池に移動する（事例10：6月29日）

3-④捕まえたザリガニを他児に「見て！」と見せる。他児が「手で捕まえない方がいいよ。怒るよ。」と注意を促しても、「怒らん！これ怒らんよ」と一度水に戻したザリガニを再び捕まえる。（事例12：6月29日）

3-⑤他児に「おもしろいね楽しいね。ねえ泳ごうやここで！」と話かける（事例13：6月29日）

3-⑥（川の）途中深くなっているところを指さし「温泉みたい」と保育者に話す。（事例13：6月29日）

3-⑦立ち止まり大きく手を広げて、「まだ行っちゃダメで一す」と言って、先に進もうとする女児を通せんぼする。（事例14：7月9日）

<考察>

第3期になると、さらに夢中度が高まり、自然の中でいきいきと活動するA児の姿が見受けられるようになる。他者とのかわりについても、そのバリエーションが広がっている。3-①～3-⑥のエピソードは、いずれも川遊びの場面である。3-①のエピソードでは、オタマジャクシを捕まえようとする他児にアドバイスをしており、他者の行為に対する積極性がみられる。3-②3-③のエピソードにおける他者とのかわりは、ザリガニそのものに対する興味から生じた

ものであり、第1期の自然そのものよりも他者に応答・承認されることに重点をおいたかわりから、質的に変化したものであると考えられる。3-④のエピソードでは、知識先行型で直接体験が不足しており、臆病な面を持つというA児とは、まったく異なる姿を見せている。このエピソードにおいても、「見て！」とザリガニを見せているが、これはザリガニが取れたことのうれしさ・誇らしさを他児に提示しているものと思われる。3-⑤のエピソードでは、他児と活動を共有したいという思いから積極的に遊びを提案している。3-⑥のエピソードでは、保育者に川の深い部分を「温泉みたい」と発言しているが、これも「応答・承認の要求」というよりも、自分が思ったことを素直に伝えているように思われる。最後の3-⑦のエピソードでは、森の中で通常子どもたちだけではいけないところに差し掛かったため、D先生が来るまで行ってはいけないという意味で通せんぼをしており、これは他者へのルールの提示として捉えることができる。

第3期における他者とのかわりを全体的にみると、次のようなことがいえる。1点目は、ルールの提示、遊びの提案など、他者に対する積極性が増しているということである。2点目は、初期は自然よりも「人」に対する興味が大きかったのに対して、自然そのものに興味をもったうえでの他者とのかわりに変容しているということである。

4. 総合考察および今後の課題

4.1. 総合考察

以上、A児の自然との相互作用における変容プロセスについて、他者とのかわりに着目して明らかにした。その変容プロセスとは、次のようなものである。第1期では、活動の中で自分が見つけたものを他者（主に保育者）に報告することによる、見てほしい、認めてほしいという「応答・承認の要求」としての他者とのかわりが中心であったのに対し、第2期では、自らの「こうしたい」という希望を叶えるために支援を求めたり、自分の思考を確認したりするための他者とのかわりがみられるようになった。また、第1期では保育者とのかわりが中心であったが、この時期には他児が「モデル的存在」「挑戦意欲をかきたてる他者」となり、A児の目標達成が促されるというかわりもあった。第3期では、他者とのかわりのバリエーションが飛躍的に拡大する。他児へのアドバイス、ザリガニの好物や居場所に関する質問等の自然物に対する興味から生じたコミュニケーション、積極的な遊びの提案、ルールの提示などさまざまな形での他者とのか

かわりが見受けられた。

このような変容プロセスから読み取ることができるのは、次の2点である。1点目は、A児の興味の対象である。初期段階では、自然の中での活動であっても自然そのものに興味を示しているというより、自分の発見を報告しそれを他者に認めてもらうこと、すなわち「人」に重点が置かれていたのに対して、活動の後期では、自然そのものに対する興味へと移り変わっている。2点目は、A児の態度についてである。当初は、保育者に指示された活動を受動的に行っていたが、次第に自分なりの思考をめぐらせたり、積極的に提案したり、質問したり、ルールを提示したりするようになっていく。このように、A児は次第に積極的・主体的に自然や他者とかかわるようになっていったといえる。

それでは、A児のこのような変化の要因としては、一体どのようなことが考えられるのだろうか。一つには、新入園児であったA児が、園生活や園の自然環境に慣れていったということが考えられる。また、本研究の観察場面だけでなく園生活全体のなかで、自信を積み重ねる経験があったのではないとも考えられる。このようなA児自身にまつわる要因の他に、A児の変容にかかわるものとして挙げられるのが、活動内容の変化である。本研究の対象は、園では「森」と呼ばれている自然の中で行なわれる設定保育場面であったが、その活動内容は時期を追うごとに変化している。以下では、この活動内容の変化に着目してA児の変容プロセスを捉えるために、時期ごとにA児の変化と活動内容の変化を対応させる形で考察を行なう。

【第1期】

A児 園生活にも森にも慣れていない状態である。保育者に指示されたことをやってみるものの、あくまで受動的である。夢中度が高い場面もあまりみられず、興味も長時間持続しない。A児の興味の対象は自然そのものよりも、他者であり、「応答・承認の要求」として他者に呼びかける姿がよく見られた。

活動内容 森の中で特定の自然物を見つけるなど、みんなで一齐に同じ活動を行なう形式がとられており、かなりプログラム化された活動であった。

【第2期】

A児 第1期に比べて活動に没頭する場面が増える。ただ指示されたことをやるだけではなく、自分なりに思考する姿が見られるようになる。そのような思考を確かめたり、さらに展開したりするための他者とかかわりが見られるようになる。

活動内容 自然環境や活動への慣れが見られる一方で、これまでのプログラム化された活動に対する子どもの興味が持続しないことが増える。

【第3期】

A児 活動に対する夢中度がさらに高まる。他者とかかわりにについても積極性が増し、また自然そのものに対する興味からの他者とかかわりも増えた。

活動内容 活動の自由度が高まり、子どもの興味に沿った活動が行なわれるようになる。

このようにしてみると、活動内容がプログラム化された一斉活動から、自由度の高い活動になるに従って、A児の活動への夢中度が増し、他者とかかわりも広がりを見せていることがわかる。しかし、先述のとおり、このようなA児の変化には本人の成長等さまざまな要因がかかわっていると考えられ、活動内容の変化がA児の変容をもたらしたとは一概に言い切ることはできない。だが、一つの要因として活動内容がA児の変化にかかわるものとして捉えることで、自然の中での保育の在り方について考える上での何らかの示唆を得ることができるのではないかと考える。

4.2. 今後の課題

本研究は、自然との相互作用におけるA児の変容プロセスについて、他者とかかわりに焦点化して検討を行なったものである。そのため、A児の変容プロセスがどこまで自然との相互作用によるものであったのかという部分については十分に検討されていない。また、本研究ではビデオフィールドワークおよびSCATによる質的分析という手法を用いたがA児の変容プロセスがどのようなものであるのかを捉えるにあたって、主観を免れない部分がある。

加えて、エピソードの抽出にあたっては、自然との相互作用が活発になっているという想定に基づき、A児の夢中度の高い場面のみを抽出したが、それ以外でのA児の活動や変容がどのようなものであるのかについては本研究で扱うことができなかった。

今後は、以上のような点を踏まえた上で、「自然との相互作用」の中で幼児がどのように活動し、変化していくのかについて、より多様な観点からの検討が必要となるだろう。

【引用文献】

- 越中康治・杉村伸一郎「保育者の自然観はいかにして形成されるか? (1)―「森の幼稚園」の保育者が語る現在の自然観―」『幼年教育研究年報』第30巻、2008年、49-59頁
- 藤井伊都子・高月教恵「乳幼児の自然環境について(1)―保育における春の環境構成の視点から―」『順正短期大学研究紀要』第32号、2003年、47-57頁
- 福田靖「森の幼稚園と環境教育のかかわり：五感を

- 使って自然を体験する」『紀要 visio: research reports 35』2006年, 83-88頁
- 井上美智子「幼児期と自然とのかかわりーいままでは」『発達』第96号, 42-46頁
- 石倉卓子「保育内容の指導法に関する一考察: 自然とかわる保育環境を通して」『富山短期大学紀要』第43巻2号, 2008年, 1-10頁
- 川口順子・宮里暁美・工藤佐枝子「日常に自然を取り込む保育実践ー都会の中の『森の幼稚園』」『発達』第96号, 2003年, 47-52頁
- 腰山豊「幼児の環境教育についての実践研究(2): スウェーデンにおける自然保育の実際」『聖園学園短期大学研究紀要』第31号, 2001年, 25-42頁
- Laevers, F. (Ed.) (1994). The Leuven Involvement Scale for Young Children. Video-training tape and manual. Leuven, Centre for Experiential Education.
- 松田順子「自然を生かした保育環境に関する研究: 散歩, 園庭保育を通して」『東九州短期大学研究紀要』第10号, 2004年, 55-71頁
- 大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案ー着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第54巻2号, 2008年, 27-44頁
- 田尻由美子・無藤隆「幼稚園・保育所における自然環境と『自然に親しむ保育』の実態について」『日本保育学会大会研究論文集』第56巻, 2003年, 420-421頁
- 田尻由美子・無藤隆「『自然とかわる保育』で育つ力についての評定基準と実証的研究の試み」『精華女子短期大学研究紀要』第31巻, 2005年, 27-35頁
- 吉田若葉・宮本慶子「自然環境と子どもの育ちに関する一考察: D幼稚園・5歳児での実践(1)」『北陸学院短期大学紀要』第40号, 2008年, 173-196頁
- 文部科学省『幼稚園教育要領』2008年
- 百合草禎二「ドイツ『森の幼稚園』の実践と子どもの発達ー森の中で育つ子ども」『常葉学園短期大学紀要』第33号, 2002年, 135-165頁

【謝辞】

本研究にご協力いただきましたF幼稚園の教職員および幼児の皆様に心より感謝申し上げます。

